研究

中島子玉著「日本詠史新楽府」（一）

解説・挿絵　佐藤　巧
（会員　佐伯市池船町）
編集・校正　鶴野博文
（会員　佐伯市田の浦町）

【解　題】

幕末の頃、文教佐伯城下には数多の優れた文人が育ったが、中島子玉は特に天下の奇才として夙に其の名を広く知られ、前途を嘱望されながら、惜しくも三十四歳の若さで急逝した。恩師、廣瀬淡窓はその死を惜しみ、彼の遺稿がいつの日か世に出ることを期待したという。

文政十二年（一八二九）子玉が京阪に遊学した際、頼山陽の『日本詠史楽府』に出会い、大いに刺激を受け発奮、自ら山陽の楽府を補足する六十六首を編纂、『新楽府』とした。

その後、篠原小竹、廣瀬旭荘、淡窓らに批評を仰ぐなどを通して世に出たと思われるが、この木版本は子玉没後三十五年の明治二年（一八七〇）に刊行されたもので、日本史の中の興味ある題材六十六首を楽府体の漢詩に詠み、漢文の解説が付されている。当時は、漢詩漢文の学習と共に日本史が学べる画期的な教科書となり得たと思われる。

因みに、「楽府」とは前漢時代に設置された音楽を司る役所の名で、その業務のひとつに政治の参考にするため、民間の歌謡を採集、楽府で楽曲にあわせて歌わせたものをいうようになり、のち、それらの歌詞そのものが「楽府」と呼ばれるようになった。この時代の作品を「古楽府」というのに対して「新楽府」は唐代の新歌などをさす。子玉の「新楽府」は山陽の作品に対する気持ちが含まれた呼び方かと推測される。

【研究の経過報告】

漢文に疎遠な現代の人々にとって郷土の先哲の作品に少しでも親しんでもらいたいと解読を試みることにした。

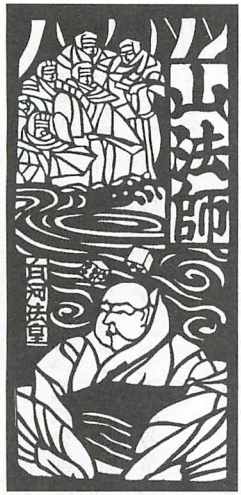
まず、原本では文頭「楽府詩」が一段と大きい文字で書かれており、これには原文を付して読み下し文を添え、こ

の楽府詩の背景の解説をなす長文の漢文は原文の味をできるだけ取り入れるようにして現代語訳にしたが、子玉の日本史理解力に及ばない所は、編集者の独断で補助的な文言を適宜取り入れ、史実の背景理解を補助する（註）を附し、最後に「楽府」の主題をあらわす解読者（佐藤巧）自作の切り絵を入れて仕上げた。

なお、作品の内容について、「楽府」は史上の事件の精髄のみを叙述してあり、格調高い漢文の説明がそれに続いていて、難解な点もあるが、魅力的である。

紹介順については勝手ながら読者に親しみやすいと思われる中世から始めることにした。

最後に、この天才的な碩学の作品に対し、不遜にも挑戦を試みたゆえ、数多の誤りなどについては皆様方の叱正・ご鞭撻を乞う次第である。



十七　山法師（主題＝白河院の権勢）

（楽府詩）　　（読み下し）

雨有罪　下雨獄　　雨に罪有らば雨を獄にくだす
吾所欲為皆如意　　吾が為さんと欲する所皆意の如し
唯有三箇奈不得　　唯三箇のみ奈（いかん）ともなし得ざる有り
不奈鴨河不奈采　　鴨河、采（の目）、山法師
不奈山法師犯輦轂　　輦轂（れんこく）を犯すを奈ともし得ず

（通　釈）

三条帝を継ぐ七十二代白河天皇は院政を創め強権を誇ったが、山法師即ち比叡山（延暦寺）の僧や興福寺の僧徒らが輦轂（天皇のひざもと）で強訴を繰り返すなどを、鴨河の流れや采（さいころ）の目に例え嘆いている。

（漢文解説の現代語訳）

白河帝は器の広大な大人物である。賞罰は明確で、しっかりとした判断に基づき、果断に採決実行する。

政りごとも宮中だけにとどまらず、積極的に外に出て行うので藤原権門なども、うかと手が出せないのである。これは後三条帝の風を受け継いでいるものと思われる。

而しながら、反面激しい愛憎の念のおもむくままに、旧来のきまりを無視して任官や授職を行い院政を創めるに当っては、北面の警固の武士強化のための長官（別当）を置いたり、凡そのことは院宣をもって天下に号令しているのは明白である。

嘗て白河帝曰く「天下に朕の命令を聞かぬものはいないが、ただ、意の如くならぬのは、鴨河の水、山法師、サイコロの目だけだ」と。

また、白河帝は仏法を信じ、六勝寺と称せられる六つの寺を建立されたが、其の中の法勝寺の落慶式の日に、手ずから書き上げられた金字大蔵経を納める予定だったが、たびたび、雨のため中止となると、雨に罪有りとし、雨を器に盛って、それを獄に下したので、これを「囚雨」と謂う。

（語　釈）

・院宣　「院の宣旨」の略。院司が上皇または法王の命を受けて出す公文書

十八　叔父児（鳥羽・崇徳・後白河の縺れ）

（楽府詩）

新天子　叔父児
艶妻有舌暗傾危
綏皇一箭（矢）鑿混沌
或疑禍胎于斯時
賢哉菟道雉郎子
千載使人拝且起
嗚呼菟雉郎子之魂
独不死

（読み下し）

新天子は叔父児
艶妻の舌暗傾危あり
綏皇一箭をもって混沌を鑿つ
或る人疑うらくは禍この時に
胎みしかと
賢なる哉　菟道雉郎子
千載人をして拝せしめ起たしむ
ああ、菟道雉郎子の魂
独り死せず

（通　釈）

新天子（崇徳）は鳥羽の皇子だが、実は白河院の胤だと鳥羽帝も信じていたので、後に入内した超美人の得子（とくし）に皇子が誕生すると、自分の産んだ子を皇位にと、策謀の舌は冴え、皇室は混乱分裂に向かう。

心ある人は、此の事が後々の禍の遠因になったのではと疑っている。古事記に綏靖天皇が一矢で以て後継問題を収め、菟道雉郎子が死を賭して兄に皇位を譲ったのは心から尊敬すべきことである。

（漢文解説の現代語訳）

鳥羽帝の太子、顕仁（あきひと）、禅譲を受け崇徳天皇となる。

帝母の璋子（しょうし）は幼い時、白河法王の猶子（養女）として養育された。帝これを鍾愛（しょうあい）（溺愛）し、長ずるに及ぶも鍾愛は衰えなかった。

さらに、白河帝は弱冠十五歳の鳥羽帝の中宮として十七歳の璋子を入内させてからも不倫の関係は続いたので頗る物議に及んだ。

鳥羽はこれを以て崇徳を我が子と見做さず、軽く「叔父児」と言っていた。

不満の鳥羽は、新たにこれも超美人の得子（とくし）（美福門院）を中宮に入れて寵愛、皇子、体仁（なりひと）の誕生を待っていた。

これを崇徳に養育させ、彼を欺いて体仁を崇徳の子として「皇太子」とするように説得、僅か四歳の体仁に禅譲させ、近衛天皇として即位させた。

しかし、譲位の宣命には「皇大弟」と書かれてあり、これでは崇徳は院政が行えない。落胆の崇徳は二十二歳だった。

ところが、近衛帝は十七歳で早世したので、当然、崇徳上皇は復位を望み、もし叶わぬとしても、子供の重仁は賢才豊かに成長しており、中外から嘱望されているからと大いに期待していた。

（崇徳希復位崇徳皇子重仁又長而賢中外嘱望）

（語　釈）

・傾危　　国をあやうくする。

前途の希望を打ち砕かれた美福は、このままでは自分の影響力の失われることを危惧、関白の忠通と謀り、「近衛帝の早世は呪詛によるもの」という噂を流し、密かに鳥

羽帝に勧めて、崇徳側の力を徹底的に排除するため、同母であるにもかかわらず叔父児の崇徳を忌避して弟の雅仁（まさひと）を後白河帝とし、その子、守仁（もりひと）を東宮としたので、崇徳系統は完全に抹殺されたのである。

崇徳の憤恚（憤懣と怒）は遂に保元の乱を醸成する。

（崇徳憤恚遂醸成保元之乱）

（編集者より）

楽府詩はもちろん、漢文の解説も背景の史実を理解するには十分な文量ではないので、随所に理解の補助となるような語句を挿入した事を諒解していただきたい。

また神武天皇と応神天皇の後継問題を解決した綏靖天皇と菟道雉郎子の話は「古事記」にのっているが、紙数の都合で漢文の口語訳は省略させていただいた。

『郷土史一口話』お皆の婚礼

過日、旧知の方から宝暦十二年（一七六二藩主高標七才）の御用日記コピーを頂いた。早速解読していたら、六代の娘でお皆（三〇歳）という人の婚礼記事が目に止まった。相手は巨勢日向守という幕臣であったが、何と持参金が五百両（八七五〇万円・一両＝一七万五千円）当座の小遣いとして二十両（三五〇万円）同じく二十両宛三カ年仕送り他に毎年内々の小遣いが十五両（二六二万五千円）とある。

当時十両盗めば首が飛び、一両あれば一家五人で凡そ一月は暮らせたという時代、藩の天保期累積赤字十万両から推測すれば、この時期五万両（八七億五千万円）は下らなかったと思うが、格式やメンツを保つ為には借金など気にしなかったかと思ったら、裏で両町の商人達二十人に連名で銀百貫目（一五二二両）も借用（強要）させ、献納金として受理したと書いてあり、町人にとっては迷惑千万であったが、献納金は藩の常套手段として農民にまで強要され、それは廃藩まで続いた。

― 林　寅喜 ―